

文部科学大臣賞

輝く未来のために音楽を

学校法人 市川学園 市川高等学校 2年

橋本 莉紗

初めて音楽を聴いた時、人はどんな気持ちになるだろうか。私は昨年夏、トビタテ！留学 JAPAN 4期生としてカンボジアの小学校でボランティア活動を行った。私がこの活動に興味を持ったきっかけは、カンボジアの悲惨な歴史の記事を目にしたことからである。ポル・ポト政権における内戦は全ての自由を奪い、罪無き多くの人々が亡くなった。有識者とみなされた者は強制収容所に連行されて耐え難い拷問を受け、幼い子どもは太い木の幹に叩きつけられて無残にも殺害された。その悲痛な叫び声は大音量の革命歌でかき消されていたと言われている。皮肉にも、音楽がこのような残酷な道具として使われていたことを知った瞬間、背筋に恐ろしい戦慄が走った。この事実を目の当たりにした私は、カンボジアの現状をより深く学ぶため、地雷をテーマとした模擬国連の練習会に参加したり、元国連職員の方の講演会に自ら足を運んだ。そして、内戦によって多くの芸術が失われ、未だ音楽の授業のない学校がたくさんあることを知った。そこで自分にも何か国際協力ができないかと考え、大好きなヴァイオリンでカンボジアの子どもたちに教育の重要性や夢を持つことの大切さを伝えようと決心した。

ボランティア留学で行った活動は、ペンキ塗りをはじめとする学校の修繕、英語や数字の授業の他、子どもたちにヴァイオリンを聴かせたり、楽器体験をしてもらうなどの自主活動である。また、夢を持つことの大切さを日本文化を通じて伝えるため、クラスで七夕を完成させた。驚くことに、子どもたちの短冊の大半が医師や教師になりたいという夢だった。1970年代の内戦によって多くの有識者が虐殺されたことから、現在も医師や教師が不足している。私は、このような現状の中で彼らが希望に満ち溢れた夢を抱いていることを嬉しく思うと同時に、カンボジアの輝かしい未来を確信した。

この留学をきっかけに、私はもっと多くの人々に音楽の素晴らしさや夢を届けるため、今年2月、WSO（ワールドシップオーケストラ）という団体の一員として再びカンボジアへ飛んだ。WSOとは東南アジアを中心に音楽を届けるオーケストラ団体である。現地では、郊外の学校、ショッピングモール、プノンペン大学、盛大なフェスティバルなどで演奏を行った。中でも一番印象に残っている活動は、郊外の学校での演奏である。そこでは、オーケストラを聴いたことや楽器を見たことのない子どもたちがたくさんいた。彼らが演奏を聴いている時の夢見るような表情や、楽器体験で上手く音が鳴らせた時の輝く笑顔は一生忘れられない。だが実は、音楽を届けた私たちこそが、彼らからたくさんの勇気や笑顔を貰っていたということに気づかされ、改めて音楽を続けてきて良かったと感じた。

現在、東南アジアの中でも目まぐるしい発展を遂げているカンボジアだが、未だ教育を受けられない子どもたちが多くいる。プロジェクト中に訪れたアンコールワットでは、ポストカードやスカーフを観光客に売る子どもたちがたくさんいた。私はすぐにでも買ってあげたい衝動に駆られたが、児童労働の法律上の理由により買うことが許されなかった。また、私が道を歩いていた時、突然5歳くらいの男の子に腕を掴まれた。その子は私が身につけていた時計を指差し、必死に何かを訴え

た。おそらく、男の子は時計が欲しかったのだろう。私は、ただ黙って何もしてあげられなかった自分の無力さに悔しさを覚えた。今でもその男の子の、下からすくい上げるような媚びる瞳が度々思い出される。同時に、このような子どもたちを少しでも減らすような活動を積極的にしていかなければならない、それが今後の私の課題だと強く感じた。

私は9月に再び、フィリピンで行われる WSO のプロジェクトに参加する。これからも音楽を届け続ける。子どもたちの輝く未来のために。